

# 石川啄木が萩原朔太郎に与えた影響と両文学者の共通性

On the Ishikawa Takuboku Affected Hagiwara Sakutarō  
and the Similarities between Them

水 野 信 太 郎  
Shintaro MIZUNO

## 1. はじめに

本稿は歌人・石川啄木（いしかわ・たくぼく、1886～1912）が萩原朔太郎（はぎわら・さくたろう、1886～1942）という詩人に与えた幾点かの影響と、同時に両者の共通点を明らかにしようとする論考の端緒である。啄木と朔太郎という日本近代を代表する詩人2名は、近世末から明治時代までの日本語を今日の現代語に連なる表現へと大きく変革した2人の巨頭であると目されている。そのような状況を受けて、彼ら両名が生涯をかけてなし得た仕事を跡づけようとする研究を本稿から開始したいと考えている。

## 2. これまでの研究活動

筆者は、概ね10年ほど前から石川啄木（本名：石川一、いしかわ・はじめ）が日本近代において占める位置づけ及び現代の日本語ならびに日本文化に与えた影響ほかを考察し、その結果を順に公表してきた。それらの研究成果は、拙稿「地域振興装置としての石川啄木」<sup>1)</sup>、同じく「啄木作品に見る20世紀初頭の道内生活」<sup>2)</sup>、『『一握の砂』発刊百年後の北海道と盛岡』<sup>3)</sup>、そして「石川啄木が『日本人受け』する4要素～啄木の作品と生涯の両面における「わかり易さ」～」<sup>4)</sup>などとして公刊されている。

加えて石川啄木1人だけでなく、啄木とのつながりが見られる人々の生涯と作品を石川啄木と比較することによって何らかの関係性を捉えようと試みてきた。それら既発表の拙稿で触れた人物を具体的に列挙すると、北原白秋（きたはら・はくしゅう、1885～1942）の名を挙げることができる。白秋に関して記述したものとしては、「北原白秋の作品に見る近代産業と日常生活－石川啄木との比較を中心に－」<sup>5)</sup>と題した論考がある。

白秋とは別に、歌人・佐佐木信綱（ささき・のぶつな、1872～1963）とその門下生である木下利玄（きのした・りげん、1886～1925）に関しては、「佐佐木信綱・木下利玄師弟作品に見る近代日本と庶民生活－石川啄木との比較から－」<sup>6)</sup>を発表した。

また石川啄木との比較研究作業を直接実施したわけではないが、啄木に関連する文学者として個別にとりあげてきた文学者もいる。それは詩人であり童話作家でもあり、啄木の後輩でも

あった宮澤賢治（みやざわ・けんじ，1896～1933）である。賢治に関しては「宮澤賢治を種子とする生涯学習とまちづくり」<sup>7)</sup>という拙稿がある。

宮澤賢治単独ではなく、啄木と賢治双方の存在を活かしながら地元で地域振興（主に経済活動）・まちづくり（生活環境改善が中心）を実践している事例を見出した報告もある。それは菊地達夫氏との共著だが、「北海道と東北における地域資源を活かした活動」<sup>8)</sup>である。一方で、宮澤賢治作品をより詳細に読み込む行為の提案として、従来の路線とは大きく異なる別な視点からの試みもした。それは今後の展開が問われるものの、「最小限「注文の多い料理店」復元の試み」<sup>9)</sup>という拙稿に見られる新しい方向性を示す試論も含まれている。以上のように宮澤賢治関連の論考は、今日までで3編に及ぶ。

石川啄木ならびに宮澤賢治の延長線上に位置すると見られる繋がりから、筆者たちが研究を継続・展開していった童話作家に新美南吉（にいみ・なんきち、本名：新美正八・しょうはち、1913～1943）がある。南吉を起爆剤とした愛知県における歴史的環境保全とまちづくりに言及した論考を、本年度に至ってまとめることができた。それは、本学の北翔大学北方圏学術情報センター研究員である野口英一朗氏と20年以上協働で継続してきた研究成果の一部である「童話作家・新美南吉ゆかりの歴史的建築物と郷土のまちづくり」<sup>10)</sup>と題した共著である。

### 3. 作品での発表

上記のような論文・論考とは別に、研究の一環として「作品」という形式をとった成果の報告発表も続けてきている。創作活動としては木版画という表現と、4×5インチ版カラー写真という形での調査記録の積み上げである。それらは石川啄木に関する内容だけでも、「石川啄木少年期の生活空間」<sup>11)</sup>、「啄木青年期の生活空間」<sup>12)</sup>、「石川啄木教員時代の生活空間」<sup>13)</sup>、「石川啄木晩年の生活空間」<sup>14)</sup>、「石川啄木のいる都市景観－北海道函館市－」<sup>15)</sup>、「啄木像を求めて 平成25年－盛岡・札幌・旭川・釧路－」<sup>16)</sup>、「石川啄木が姿を見せる都市・2015年」<sup>17)</sup>の7編に及ぶ成果となって残されてきた。

別に、同郷の宮澤賢治についても「賢治のいる岩手風景・2011年夏」<sup>18)</sup>、「宮澤賢治のいる光景と建築物」<sup>19)</sup>、「賢治が住む都市の今日・2013」<sup>20)</sup>の3編を作品発表してきた。

また新美南吉については、「生誕百年目の新美南吉－2013年のふるさと半田－」<sup>21)</sup>ならびに「新美南吉ゆかりの建物たち－ビール会社と教員時代の下宿－」<sup>22)</sup>の2編を発表した。

それらだけでなく、昭和10年代の前半に啄木の故郷である渋民村を、自身の死の前年に命を削りながら訪れた詩人もいた。それは立原道造（たちらは・みちぞう，1914～1939）という詩集『四季』派の若き詩人・建築家であった。彼に関する作品発表も当学部紀要の前身である生涯学習システム学部の研究紀要においてしている。それは「詩人・建築家：立原道造の百年－啄木故郷を最期に訪ねて－」<sup>23)</sup>であった。

道造よりも年配ながら、第二次世界大戦の末から戦争終結後に岩手県内の花巻とその近郊で

過ぎた人物がいた。文学者であり美術分野の人であった高村光太郎（たかむら・こうたろう、1883～1956）である。その姿は疎開に始まり、その後は隠棲に近いものであった。彼は、啄木と賢治双方に関わりをもっていた。その光太郎に触れた作品としては、「彫刻家・詩人・書家：高村光太郎の“方丈”－岩手の啄木と賢治への連なり－」<sup>24)</sup>と題する拙稿を発表した。

より年代的には遡る文学者であり、しかも西洋人であった小泉八雲（こいずみ・やくも、ラファディオ・ハーン、1850～1904）を扱った作品も発表してきた。彼に関する「八雲の眼：明治中後期の日本発見－漱石・啄木・賢治・南吉・道造へ連なる山容－」<sup>25)</sup>にあつては、筆者自身がこれまで日本近代文学史を学ぶことによって深めてきた学習の成果として、現時点において理解している山容（文学者の群像）を限られた範囲ではあるものの披瀝することができた。

上記に述べてきた調査活動を受けて、本稿では研究内容の進展を望みたい。その1番目の目的として、歌人・石川啄木が初期の萩原朔太郎に直接与えた影響を探ってみたい。それらを列挙すると共に、啄木と朔太郎両名の間に共通して見られるいくつかの興味深い点についても検討を重ねることを第2の研究目的とする。

#### 4. 中村稔・著『萩原朔太郎論』に見る啄木と朔太郎

本研究を進めていく際、きわめて有効な文献が近年公刊された。それは中村稔による『萩原朔太郎論』という大著である。その『萩原朔太郎論』は、青土社より2016年（平成28年）2月10日に初版が発行されたばかりの書籍である。同文献の総ページ数は548頁にも及ぶ大部な労作であるが、索引は付されていない。そして同書の内容は、萩原朔太郎という稀有な詩人が、近代日本にあって近代詩の抒情と韻律を生み出した過程を明らかにしようとするものである。

本研究においては、まず当該文献を案内人というような役割に設定することで、萩原朔太郎にとって、石川啄木という歌人が果たしてどのような存在であったのかについて探ることから始めたい。本稿の冒頭で掲げた2点の目的を達成するために、本研究では上に掲げた文献に準拠しながら、明治末期の代表的歌人・石川啄木が大正時代を代表する詩人・萩原朔太郎に及ぼした文学的な影響の幾点かを指摘したいと考える。

表記の『萩原朔太郎論』中に啄木の名と啄木作品が見られる箇所は、PP. 22-25, P-31, PP. 43-46, P-48, PP. 215-216, P-308, PP. 333-334, P-340, P-342の合計9箇所である。

啄木の名あるいは啄木作品が同書中に掲載されている箇所の一部を見ていく<sup>26)</sup>。21ページの半ばから次ページ以降にかけて

さて、「旅上」はおそらく萩原朔太郎の初期作品中もっとも広く知られた作品であろう。

（一行あき）

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

せめては新しき背廣をきて

きままなる旅にいでてみん。  
 汽車が山道をゆくとき  
 みづいろの窓によりかかりて  
 われひとりうれしきことをおもはむ  
 五月の朝のしのめ  
 うら若草のもえいづる心まかせに。

(一行あき)

この詩も「五月の朝のしのめ／うら若草のもえいづる心まかせに」という弾むような季節感のある二行で終わっていることによって、やはり伝統につながっている。およそ旅へのいざなひは誰もが感じながら、なかなか果たすことができないのがつねである。フランスは当時も現在も人々の憧憬の地である。この作品には、青春期の心の瑞々しさが、爽やかさがあり、それにふさわしい調べがある。

ただ、看過してならないことは、この詩を詩たらしめているのは「せめては新しき背廣をきて」という一行と、末尾の「うら若草のもえいづる心まかせに」の一行、これら二行にあるのだが、前者は石川啄木『一握の砂』所収の作

(一行あき)

あたらしき背廣など着て  
 旅をせむ  
 しかし今年も思ひ過ぎたる

(一行あき)

から着想をえているにちがいないという事実である。萩原朔太郎が石川啄木を高く評価し、強い影響を受けたことは、彼が石川啄木について書いた数多くの文章から知られるし、また、彼の初期の短歌からもはっきりしている。一例を示せば、『無からの抗争』中の「ヒューマニストとしての啄木」に萩原朔太郎は次のとおり書いている。

「啄木の生きた人生こそ、眞の詩人の生きるべく宿命された人生だつた。なぜならば啄木の求めたものは、詩を技術する為の人生でなくして、詩を實現するための人生だつた。即ちつまり言へば、彼は本質的のヒューマニストであつたのである。「人は如何にして善く生くべきか？」これが彼の一生考へた詩人生活のモラルであつた。」

「ハイネがイロニツクの諷刺家であつたやうに、啄木もまた反語的の諷刺家であり、時には故意に道化て自分をピエロのやうに表現したり、皮肉な毒舌で人を罵つたりした。しかも彼の若い魂は、最後までロマンチストとしての夢を持ち續けた。そして此処に彼の痛ましい詩人的の悲劇があつた。」

明治以来、日本には多くの天分ある詩歌人が出た。しかし眞の人生熱情を持つたところの、眞のヒューマニストとしての詩人は、おそらく石川啄木一人であらう。」

この啄木観の当否はしばらく措く。石川啄木のばあい、新しき背広など着て旅に出ようと

思っても、窮乏のため、そんなことは夢想にすぎない。空しく歳月の過ぎ去るのを見送るばかりであった。この歌には石川啄木の痛切な嘆きがこめられている。これに反し、萩原朔太郎は富裕な家庭に育ち、フランスは遠すぎるとしても、新しい背広を仕立てて旅に出ようと思えば、いつでも可能な、恵まれた境遇にあった。そういう意味で、「旅上」は苦勞知らずの青年の気楽な気分の横溢した作であり、明るい作品である。

とある。筆者個人は、中村説にいう「初期作品」のみならず、全ての萩原作品で一番有名な作が「旅上」であると考えている。

そのような筆者の考えの傍証として掲げることが的確か否か不明だが、わが国の近代詩歌の代表作を集成した掲載数限定の詩集がある。しかも同書は読者として少年少女を主眼にしているという事で、人々に最も広く知られた詩人たちの作品を網羅している文献である。その文献とは『日本名作絵本〔特装版〕 28 近代の詩』<sup>27)</sup>である。この書籍には国木田独歩、土井晩翠、島崎藤村、与謝野晶子、高村光太郎、山村暮鳥、北原白秋、萩原朔太郎、室生犀星、堀口大学、佐藤春夫、宮沢賢治、丸山薫、三好達治、中野重治、草野心平、山之口獏、伊藤整、伊東静雄、中原中也、立原道造、黒田三郎の詩人22名が掲載されている。

とりあげられている詩は1作品ずつで、国木田独歩の「山林に自由存す」に始まり、土井晩翠「荒城の月」、島崎藤村「小諸なる古城のほとり」、与謝野晶子「君死にたまふことなかれ」、高村光太郎「あどけない話」、山村暮鳥「雲 / おなじく」、北原白秋「落葉松」、そして萩原朔太郎の「旅上」である。さらに同世代の室生犀星「小景異情」以下、堀口大学「夕ぐれの時はいい時」、佐藤春夫「秋刀魚の歌」、宮沢賢治「永訣の朝」、丸山薫「学校遠望」、三好達治「雪」、中野重治「あかるい娘ら」、草野心平「富士山 作品第肆」、山之口獏「結婚」、伊藤整「吹雪の街を」、伊東静雄「わがひとに与ふる哀歌」、中原中也「汚れつちまつた悲しみに」、立原道造「眠りの誘い」、黒田三郎「夕方の三十分」と続いている。

石川啄木生涯の代表作が詩集『あこがれ』とは見られていない。啄木の名が高く評価されるのは、歌人としての石川啄木である。つまり啄木の代表作は、歌集『一握の砂』及び『悲しき玩具』に収められた短歌作品であるため、上記の詩集には歌人・啄木は登場しない。

上に掲げた『日本名作絵本 28 近代の詩』で選ばれた日本の代表的な詩作品の中には、本来の題名ではなく、詩歌中で詠われた言葉を詩の題としている例もある。その点はともかく、同書において萩原朔太郎の代表作として「旅上」が選ばれている。やはり筆者個人が理解している萩原朔太郎の作品中で最も広く知られた詩は、そこに描かれた内容から判断しても、詩歌としての韻すなわち言葉の音そのものやリズムのつながりなどから考えても、

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

という「旅上」が一番に位置する。文学の専門家でなくとも、ある人が「フランスへ行きたしと思へども」と冒頭を問いかければ、相手の者は「フランスは余りに遠し」と答えることができるほど、無理のない繋がり方をしている有名な詩が「旅上」なのである。

話を啄木と朔太郎に戻したい。反骨の詩人として知られる金子光晴（かねこ・みつはる、1895～1975）が認識するところによれば、現代日本語を創出した近代人は、石川啄木と萩原朔太郎の2人であるとのことである。しかし朔太郎自身による評価では、「非時代的な古典性を一掃して、文語詩をそのまま現代語化した」のは自分自身ではなく、室生犀星（むろう・さいせい、1889～1962）であるという。さらに続けて「實に日本の文語詩は、犀星によつて全くスタイルを一新し、本質上に於て、現代口語詩と同じやうなものになった。（その點、犀星の詩業は、短歌に於ける石川啄木と似たところがある。）」と結論付けている。

同書に関して中村は執筆する際、萩原朔太郎の全集15巻と補巻だけを根拠にしたと明言している。彼は先学の研究等を一切参照せず全集だけに基づいて記述したという大変に興味深い研究態度・研究手法である。したがって先行研究で触れられている視点もあり得ると断っている。

本書の執筆にさいし、私は先学の研究、評論、回想の類はもちろん、全集の月報に至るまで、一切参照しないこととし、もっぱら全集だけにもとづいて私見をくみため、記述することとした。とはいえ、私は多年萩原朔太郎に関する研究書等を収集し、寄贈されたりしてきたので、また、その一部は読んでいるので、私見と考えたことも先学の影響をうけているかも知れないし、私見と考えた見解もすでに先学が指摘しているかもしれない。しかし、私としては徹頭徹尾全集だけにもとづいて執筆したものである。

と後記の中で明言している。今日のように情報過多な時代にあつては、そのような文献研究上の姿勢も潔い一つの新鮮な新しい方法だと、筆者は表題文献の研究方針から強い感銘をうけた。

## 5. 啄木が朔太郎に与えた影響

本章では、石川啄木が萩原朔太郎に与えた影響を再確認する。前章で掲げた啄木から朔太郎が受けた影響には、以下の2点が大きかったと考えられる。

- ① 正直に心のうちを吐露することによって、近代的な詩歌世界を樹立できるという確信
- ② 上記の素直さを表現する手法として、日常生活の口語文による表記の可能性・妥当性

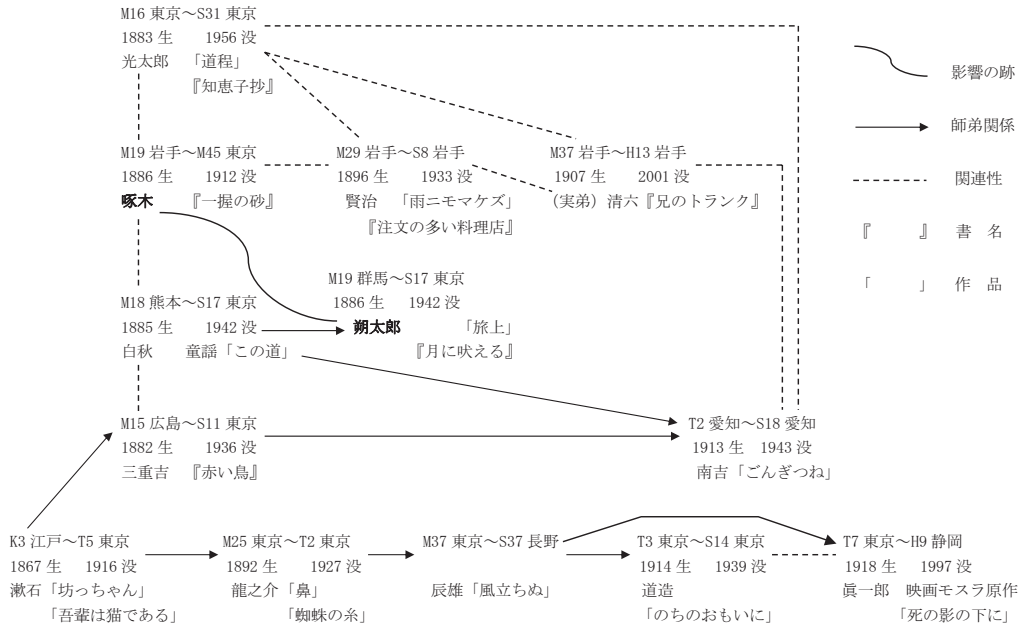
ここで石川啄木が萩原朔太郎に与えた影響を示す図を提示する。この図－1「石川啄木と萩原朔太郎の影響関係はかを示す図」では啄木と朔太郎2名のみに限定することなく、筆者がこれまで関心を寄せてきた幾人かの文学者たちも登場させている。その軸となる山脈は夏目漱石とその門下の人々である。また岩手県と縁をもった文学者たちの一群である。

具体的な作品にあっても、啄木から朔太郎への影響は明快だ。朔太郎の

「クロバアの上に寝ころび／空ばかり眺めてありし／中學の庭。」

などである。これなどは啄木の「教室の窓より遁げて／ただ一人／かの城址に寝に行きしかな」と「不来方のお城の草に寝ころびて／空に吸はれし／十五の心」を連想してしまう。その事とはともかく啄木作品には後年、詩（朔太郎）や童話（賢治）などの作者として名を残す青年たちに文学作品を書き始めさせる不思議な力があつた。





図－１ 石川啄木と萩原朔太郎の影響関係ほかを示す図

## 6. 啄木と朔太郎の共通性

彼ら2名には、いくつかの共通点がある。まず石川啄木も萩原朔太郎も、家の長男として生まれた。そして生まれ育った家庭が、女兄弟の多い家族であった。それでいて、2人とも頼りがいのある長男像とは少しずれた生涯を送ることとなる。学業を途中で投げ出すなどである。このことが災いしてか、彼らは故郷やその土地の人々との関係において好ましくならぬ間柄となってしまった。

司馬遼太郎は『坂上の雲』という長編小説の冒頭で

(前略) 俳句、短歌といった日本のふるい短詩型に新風を入れてその中興の祖になった正岡子規である。子規は明治二十八年、この故郷の町に帰り、

(一行あき)

春や昔十五万石の城下かな

(一行あき)

という句をつくった。多少あでやかすぎるところが難かもしれないが、子規は、そのあとからつづいた石川啄木のように、その故郷に対し複雑な屈折をもたず(以下略)と書いている。東北の啄木も北関東の朔太郎も実は、ふるさとの人々から「石をもて追はるる」ことがあったし、「あそこをばかがいく」と後ろ指を刺された。朔太郎は「誹謗と、嘲笑と、孤獨とは、田舎の郷黨が私にあたへた一切のものであつた」<sup>28)</sup>という。

一方で両文学者は、余りに正直に自己の性欲をあからさまに表出する文学活動、あるいは記

録行為を残している。きわめて興味深い共通点である。中村いわく「おそらく萩原朔太郎ほど彼が苦悩した性欲について率直に書き残した詩人は稀であろう。」<sup>29)</sup>、「萩原朔太郎はその詩においても彼の情欲あるいは性欲を数多くうたっている。」<sup>30)</sup>、「陰部の犯す罪惡により罰せられて、下半身が消えるというイメージが生まれることは、彼が感じていた罪の本質が性欲、情欲に由来するからである。」<sup>31)</sup>と指摘している。

ここで萩原朔太郎が、ふるさと前橋の人々から愚か者扱いを受け、後ろ指を差されながら人目を避けて散策した風景を掲載する。ひとつは、萩原朔太郎が人目を避けて散策した監獄裏である。現代では刑務所の背面は、写真－1に見られるような整備が施されている。

2点目の写真は、朔太郎が疎外感を感じた故郷・前橋の情景である。朔太郎直伝の弟子である伊藤信吉先生の案内で撮影したものだが、当該煉瓦造倉庫建築物も今日では取り壊されてしまった。前述の中村に言わせれば、東京であれ前橋であれ「いわば、萩原朔太郎は真に安住する土地をもたない放浪者であった。」<sup>32)</sup>となる。

啄木と朔太郎の共通性を浮かび上がらせるための試みとして、ひとつの表を作成した。表－1「石川啄木をめぐる人物群の家庭環境に関する一覧」である。この表では、小泉八雲（こいずみ・やくも、ラフカディオ・ハーン、1850～1904）、夏目漱石（なつめ・そうせき、夏目金之助・きんのすけ、1867～1916）、佐佐木信綱（ささき・のぶつな、佐々木信綱・ささき、1872～1963）、鈴木三重吉（すずき・みえきち、1882～1936）、高村光太郎（たかむら・こうたろう、1883～1956）、北原白秋（きたはら・はくしゅう、北原隆吉・りゅうきち、1885～1942）、木下利玄（きのした・りげん、木下利玄・としはる、1886～1925）、石川啄木（いしかわ・たくぼく、石川一・はじめ、1886～1912）、萩原朔太郎（はぎわら・さくたろう、1886～1942）、芥川龍之介（あくたがわ・りゅうのすけ、1892～1927）、宮澤賢治（みやざわ・けんじ、1896～1933）、丸山薫（まるやま・かおる、1899～1974）、堀辰雄（ほり・たつお、1904～1953）、新美南吉（にいみ・なんきち、新美正八・しょうはち、1913～1943）、立原道造（たちはら・みちぞう、1914～1939）の全15人に及ぶ日本近代の文学者たちを一覧にした。そして、その注目点は以下のような視点である。

経済的に余裕のある家庭に生まれ育ったのか否か、成長するまで実父が身近にあって健在だったのか、幼少期に実の母親から愛情をもって育てられたか、身体・体力面で恵まれていたか、いなかったのか、兄や姉などと共に成長するような家庭であったか、年少の弟妹たちと育てられる少年期を過ごしたか、兄弟が幼くして又は年若く他界する経験をしたか、教育を受ける機会に恵まれ活かすことができたか、自身の結婚と家庭生活が幸福なものであったのか、子供たちに恵まれ子供は健やかに育っていたのか、である。「結婚」と「子」を除けば、主として学齢期までの生い立ちに注目した。

筆者は文学者のみならず多くの人々にとって、生家が裕福であるか、貧しいかという経済的な状況の差は、その子供が受けることのできる教育をはじめとして様々な諸要素に与える影響の大きさを無視することが出来ないと考える。一方、しっかりとした父親の家庭内における存



在も多大なものがあると考え。一方で、幼き日にあって母親の役割は父以上であるかもしれない。少なくとも父と母の両方が揃っていることこそが無上の幸運であると痛感している。

経済面では中流以上であり、両親が揃っている家庭の子であっても、病弱に生まれついた子供は、やはり精神的な屈折をきたす可能性がある。その屈折が必ずしも負の面ばかりをもたらすとは限らないが、いずれにしても、その子の人柄を形成していく際に大きな要因となって現れることは間違いなからう。また兄弟姉妹の存在も幼い子供の成長期にあっては、各人の人格形成に甚大な影響を与えるものと考え。家族という存在のありようは、結局すべての人々に有形無形の作用を及ぼしていくのである。そして、そこには人の死が忍び寄る。幼くして兄弟姉妹の死に立ち会うこととなった過去。その体験が文学者に与える影響が小さいことなど決してあろうはずがない。

次は成人したのちのことになるが、親ではなく自分が家庭人として良き配偶者であったか否かである。本研究でとり挙げている文学者は、偶然にも全員が男性に偏ってしまった。したがって今回に限定していえば、彼らが家庭人として良き夫であり得たか否かを問う。このために結婚生活に注目をしている。そして更に当人が親という立場になり得たかという点についても本研究では意を注いでいる。一旦は子供に恵まれながらも、その子の死に立ち会わざるを得ない人生もある。最愛の我が子を失うという悲惨さ非情さを経験した者と、それを味合わないで済む人間の違いは大きい。

上段の項目欄に掲げた「家計」をはじめとする各項目について概要を述べておきたい。家計の欄の◎は極めて裕福な家庭、○は一般的な経済状況、△は金銭に事欠く状態を示している。父母の欄の○は、実の親が健在であることを意味する。

身体の○は主として肉体的に健康な状態、△とは疾病・あるいは病弱者、これらは当人が教育を受けていた時期までに注目した。兄弟姉妹に関しては、当人の生前に年長の兄姉が幼没している事例も含んでいる。その場合には文学者自身が幼児期に肉親の死に立ち会ったわけではないが、彼らが育った家庭に幼児の死が訪れた経緯があることを示す。

結婚欄の○が意味するものは、最終的に妻と添い遂げた結婚生活であったことを示す。

表－１ 石川啄木をめぐる人物群の家庭環境に関する一覧

	家計	父	母	身体	兄姉
八雲	◎ → △	母と離婚 → 別の女性と再婚 → 7歳で生別 → 16歳で没	4歳で生別 → そのまま生涯死を知らず (ハーン32歳)	○	兄が幼没
漱石	○	○ 0歳で里子、 1歳で塩原家の養子	先妻没後、○ 13歳で死別	○	異母姉2人、 兄4人うち1人幼没、 姉1人
信綱	○	○	先妻没後、○	△ → ○	異母姉1人幼没
三重吉	◎ → ○	○	○、9歳で死別、 祖母に育てられる	○ → △	兄2人幼没
光太郎	△ → ○	○	○	△ → ○	姉2人うち1人幼没
白秋	◎ → △	○	先妻2人離婚、○	△	異母兄1人幼没、 異母姉1人
利玄	◎	4歳で生別 → 20歳の時に没	4歳で生別 → そのまま会えず6歳の時に没	△	異母兄1人
啄木	○ → △	○	○	○	姉2人
朔太郎	◎	○	○	△	姉1人幼没
龍之介	○	実父は新原、 養父が芥川で 実母の長兄	実母が旧姓芥川、 養母は義伯母	△	姉2人うち1人幼没
賢治	◎	○	○	○ → △	なし
薫	◎ → ○	○、11歳で死別	○	○ → △	異母兄3人、 異母姉1人、 兄1人幼没、 姉1人
辰雄	○ → △	1歳で生別、 5歳の時に没	○義父と結婚、 18歳で死別	○ → △	なし
南吉	△	○、実母の死後、 継母と再婚	4歳で死別、 養母は義祖母	△	兄1人幼没
道造	○	4歳で死別	○	△	なし

弟妹	教育	結婚	子	関心・志望
弟1人、異母妹3人	カレッジ中途退学	破綻1回、○	三男一女	文筆活動
なし	大学卒業	○	二男、 五女うち1人幼没	建築設計
弟1人	大学卒業	○	四男五女	古典研究
弟2人うち1人幼没	大学卒業	死別後、再婚	一男一女	軍人・電気工学
弟4人、妹2人	美術学校卒業	○ 死別	なし	光学・理学
弟2人、 妹2人うち1人幼没	大学中途退学	2回離婚後、 再婚 ○	一男一女	蘭書の表紙など 異国趣味、 広重・北斎
弟2人、 異母弟1人、 異母妹1人	大学卒業	○	三男うち2人幼没、 一女幼没	神道・国学
妹1人	中学校中途退学	○	一男幼没、 二女（次女とは生 前に会えず）	軍人
弟1人、妹3人	高等学校中途退学	離婚2回	二女	音楽
なし	大学卒業	○	三男	歴史研究
弟1人、 妹3人うち1人早逝	高等農林学校卒業	未婚	なし	鉱物・仏教
弟4人うち1人幼没、 妹1人	大学中途退学	○	なし	船員
なし	大学卒業	婚約中死別、 ○	なし	天文学
異母弟1人	外国語学校卒業	未婚	なし	教員
弟1人	大学卒業	未婚	なし	絵画・天体観測

## 7. むすび

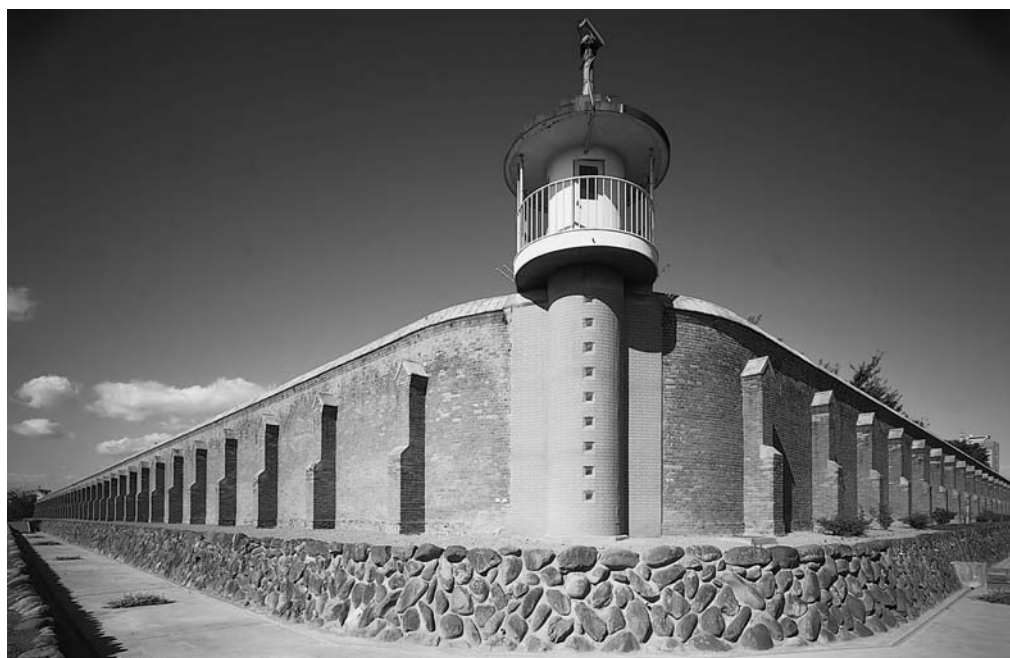
本稿では啄木との比較研究を進める対象として詩人・萩原朔太郎について論考を進めてきた。

本稿では朔太郎の作品で扱われている生活の場面に注目した。彼は石川啄木とは異なって北関東・前橋の出身であり、生活面でも金銭的に啄木とは事情が異なっていた。しかしながら出自も経歴も啄木とは相当に隔たりを有しながら、朔太郎は近代日本の日常生活を詩作品によって、結果的に記録するという文学活動を成しえた。本研究によって2人の影響関係とともに、共通性をも示すことができたと思う。

これまで見てきたように石川啄木が初期の萩原朔太郎に与えた影響は少なくないものであった。朔太郎の詩の中で最も人々に広く知られている「旅上」の発想自体が、啄木の短歌からもたらされている。また『月に吠える』という書名そのものまでもが、石川啄木の作品からとられているようである。

石川啄木と萩原朔太郎両者の共通点に関しても、いくつかの項目をあげることができる。兩人とも長男として生まれ育った。それだけでなく女性が多い家庭で育てられたことも共通している。一方それでいて、2人とも故郷との関係において屈折した心情を内包していた。その根底には学校を自分の事情で中途退学したことが影を落としていよう。そして自身の性欲をあからさまに詠いあげた作品群や記録文学など、多くの共通点が存在する。

もちろん石川啄木と萩原朔太郎の間には、大きな相違点もある。一番大きな違いは経済面で



写真－1 萩原朔太郎が人目を避けて散策した監獄裏

の差である。この違いは、2人の晩年に至るほど広まっていった。萩原朔太郎の場合は、父親が高齢となり開業医を長男である朔太郎ではなく、娘婿に任せて引退し、やがて没したのちも金銭的に余裕があった。そのような萩原家の事情に比べて、啄木自身の晩年は、極端な貧困と病苦に襲われる毎日であった。結果的に命を長らえることさえもが出来なかった。母が死に、啄木が死に、間もなく妻が死ぬ。その前には長男さえも。しかも貧乏から縁が遠のくことはなかった。

死の病だけでなく、心の面においても家族の不和、さらに叶わなかった夢など、やりきれない生活が続いた。それゆえに石川啄木の作品には心打たれる、わたしたちなのである。そのような背景から石川啄木には困窮者への眼差しがある。この点、萩原朔太郎が抱えていた苦悩とは明らかな違いを見てとることができる。朔太郎の心の中から消え去ることがなかったざわつきが、彼自身にとって耐えがたい邪魔者であったことは間違いない。だから朔太郎の悩みなどは大きな問題ではないと無視してはならない。そのような態度をとるのでは、朔太郎の心の叫びを読み取ることが到底できなくなってしまうからだ。

しかし、ここでは石川啄木と萩原朔太郎の相違点として家庭環境、特に経済的な面での違いが小さくなかったことを指摘して本稿の結びとしたい。

今後とも筆者は、啄木と共通性あるいは相違点を見出すことができる文学者たちに関心を示していきたい。本研究のように石川啄木と同時代文学者の作品ならびに経歴に研究の視点を広げることで、これまで指摘されることがなかった新しい知見を得ることが出来るのではないの



写真－2 朔太郎が疎外感を感じた故郷・前橋の情景

かと考えている。

本稿をまとめるに際して、多くの方々から多大な御力添えを頂戴した。末尾になってしまったが、この紙面を拝借して感謝の意を表するものである。

## 注

本稿において参考あるいは引用した文献を下記に掲げる。

- 1) 「地域振興装置としての石川啄木」拙稿、『北翔大学生涯学習研究所研究紀要 生涯学習研究と実践 第11号』北翔大学生涯学習研究所，北翔大学生涯学習研究所，平成20年2008年3月，PP.39-56
- 2) 「啄木作品に見る20世紀初頭の道内生活」拙稿、『北翔大学北方圏学術情報センター年報 Vol. 1』北翔大学北方圏学術情報センター，北翔大学北方圏学術情報センター，平成21年2009年3月，PP.105-118
- 3) 「『一握の砂』発刊百年後の北海道と盛岡」拙稿、『北翔大学北方圏学術情報センター年報 Vol. 3』北翔大学北方圏学術情報センター，北翔大学北方圏学術情報センター，平成23年2011年3月，PP.155-170
- 4) 「石川啄木が「日本人受け」する4要素～啄木の作品と生涯の両面における「わかり易さ」～」拙稿、『国際啄木学会会報別冊 2013年釧路大会特集号』国際啄木学会，国際啄木学会，平成25年2013年9月1日，P-14
- 5) 「北原白秋の作品に見る近代産業と日常生活－石川啄木との比較を中心にして－」拙稿、『北翔大学生涯学習システム学部研究紀要 第11号』北翔大学生涯学習システム学部，北翔大学生涯学習システム学部，平成23年2011年3月，PP.161-176
- 6) 「佐佐木信綱・木下利玄師弟作品に見る近代日本と庶民生活－石川啄木との比較から－」拙稿、『北翔大学教育文化学部研究紀要 創刊号』，北翔大学教育文化学部，北翔大学教育文化学部，平成28年2016年1月，PP.189-204
- 7) 「宮澤賢治を種子とする生涯学習とまちづくり」拙稿、『北翔大学北方圏学術情報センター年報 Vol. 4』北翔大学北方圏学術情報センター，北翔大学北方圏学術情報センター，平成24年2012年3月，PP.129-136
- 8) 「北海道と東北における地域資源を活かした活動」水野信太郎・菊地達夫，『北翔大学北方圏学術情報センター年報 Vol. 5』北翔大学北方圏学術情報センター，北翔大学北方圏学術情報センター，平成25年2013年3月，PP.79-93
- 9) 「最小限「注文の多い料理店」復元の試み」拙稿、『北翔大学短期大学部研究紀要 第55号』北翔大学短期大学部，北翔大学短期大学部，平成29年2017年3月，PP.27-40
- 10) 「童話作家・新美南吉ゆかりの歴史的建築物と郷土のまちづくり」水野信太郎・野口英一朗，『北翔大学北方圏学術情報センター年報 Vol. 9』北翔大学北方圏学術情報センター，



- 北翔大学北方圏学術情報センター，平成29年2017年11月，PP.79-93
- 11) 「石川啄木少年期の生活空間」拙稿，『北翔大学生涯学習研究所研究紀要 生涯学習研究と実践 第12号』北翔大学生涯学習研究所，北翔大学生涯学習研究所，平成21年2009年3月，PP.9-14
  - 12) 「啄木青年期の生活空間」拙稿，『北翔大学生涯学習システム学部研究紀要 第10号』北翔大学生涯学習システム学部，北翔大学生涯学習システム学部，平成22年2010年3月，PP.177-182
  - 13) 「石川啄木教員時代の生活空間」拙稿，『北翔大学短期大学部研究紀要 第48号』北翔大学短期大学部，北翔大学短期大学部，平成22年2010年3月，PP.65-70
  - 14) 「石川啄木晩年の生活空間」拙稿，『北翔大学短期大学部研究紀要 第49号』北翔大学短期大学部，北翔大学短期大学部，平成23年2011年3月，PP.91-98
  - 15) 「石川啄木のいる都市景観－北海道函館市－」拙稿，『北翔大学短期大学部研究紀要 第50号』北翔大学短期大学部，北翔大学短期大学部，平成24年2012年3月，PP.91-98
  - 16) 「啄木像を求めて 平成25年－盛岡・札幌・旭川・釧路－」拙稿，『北翔大学短期大学部研究紀要 第52号』北翔大学短期大学部，北翔大学短期大学部，平成26年2014年3月，PP.123-130
  - 17) 「石川啄木が姿を見せる都市・2015年」拙稿，『北翔大学教育文化学部研究紀要 創刊号』，北翔大学教育文化学部，北翔大学教育文化学部，平成28年2016年1月，PP.189-204
  - 18) 「賢治のいる岩手風景・2011年夏」拙稿，『北翔大学生涯学習システム学部研究紀要 第12号』北翔大学生涯学習システム学部，北翔大学生涯学習システム学部，平成24年2012年3月，PP.155-162
  - 19) 「宮澤賢治のいる光景と建築物」拙稿，『北翔大学短期大学部研究紀要 第51号』北翔大学短期大学部，北翔大学短期大学部，平成25年2013年3月，PP.105-112
  - 20) 「賢治が住む都市の今日・2013」拙稿，『北翔大学生涯学習システム学部研究紀要 第14号』北翔大学生涯学習システム学部，北翔大学生涯学習システム学部，平成26年2014年3月，PP.193-199
  - 21) 「生誕百年目の新美南吉－2013年のふるさと半田－」拙稿，『北翔大学北方圏学術情報センター年報 Vol. 6』北翔大学北方圏学術情報センター，北翔大学北方圏学術情報センター，平成26年2014年11月，PP.157-160
  - 22) 「新美南吉ゆかりの建物たち－ビール会社と教員時代の下宿－」拙稿，『北翔大学北方圏学術情報センター年報 Vol. 7』北翔大学北方圏学術情報センター，北翔大学北方圏学術情報センター，平成27年2015年11月，PP.171-174
  - 23) 「詩人・建築家：立原道造の百年－啄木故郷を最期に訪ねて－」拙稿，『北翔大学生涯学習システム学部研究紀要 第15号』北翔大学生涯学習システム学部，北翔大学生涯学習システム学部，平成27年2015年3月，PP.191-198

- 24) 「彫刻家・詩人・書家：高村光太郎の“方丈”－岩手の啄木と賢治への連なり－」拙稿，『北翔大学北方圏学術情報センター年報 Vol. 8』北翔大学北方圏学術情報センター，北翔大学北方圏学術情報センター，平成28年2016年11月，PP.169-172
- 25) 「八雲の眼：明治中後期の日本発見－漱石・啄木・賢治・南吉・道造へ連なる山容－」拙稿，『北翔大学北方圏学術情報センター年報 Vol. 7』北翔大学北方圏学術情報センター，北翔大学北方圏学術情報センター，平成29年2017年11月15日，PP.117-120
- 26) 『萩原朔太郎論』中村稔，青土社，2016年2月10日，PP.21-24.
- 27) 『日本名作絵本〔特装版〕 28 近代の詩』ティビーエス・ブリタニカ，ティビーエス・ブリタニカ，1993年1月1日
- 28) 前掲『萩原朔太郎論』P-362
- 29) 前掲『萩原朔太郎論』P-60
- 30) 前掲『萩原朔太郎論』P-94
- 31) 前掲『萩原朔太郎論』P-146
- 32) 前掲『萩原朔太郎論』P-391